

学校だより 10月号 しもながや



横浜市立下永谷小学校

「学ぶこと」

副校長 奥田 俊輔

子どもたちは、日常生活の中で、多くのことを学びながら成長しています。目の前の道を進もうとしたときに、思うようにいかなかったり、もっとよくしたいと思ったりすると、一生懸命に考えます。考えた結果、少しでも前進できると、大きな達成感を味わいます。一つ一つの達成感の積み重ねが、子どもたちのより良い学びにつながっていきます。

子どもたちのより良い学びのために、私自身が教育現場で大切にしていることが二つあります。子どもたちの学びの機会を奪わないようにすることと、学び方を提示することです。

一つ目の、学びの機会を奪わないようにすることとは、我々大人は、子どもたちが困らないように、つつい力を貸しすぎてしまうことがあります。例えば、ゲームをやりたい子が、説明書を読んでいて、読めない漢字があると質問してきます。そこで、読み方や意味を教えることがあります。しかし、「自分で調べてごらん。」と投げ返すと、ゲームを楽しみたい子は、何とかして漢字の読み方や意味を知ろうとします。人に聞くよりも、自分で調べた方が、より確実な知識として身に付きます。

また、友達とトラブルになったときにも、学びの機会が生まれます。大人が入り、互いの言い分を聞き、どうすればよかったのか、これからどうしたいのかなど、解決に向けて一緒に考えます。しかし、ここで大人が入りすぎると、子どもたちは、自分自身で解決する力を身に付ける機会を失ってしまいます。解決の仕方を知らず、そのまま大人になってしまう恐れもあります。ある程度は子どもたちに任せることで、解決の仕方を学ぶ機会を与え、力として身に付けさせることも大切です。もちろん、時と場合により、きちんと大人が力を貸す必要はあります。

二つ目の、学び方を提示することとは、例えば、言葉の意味を調べようとしたとき、インターネットや AI を活用すれば、数分で言葉の意味を知ることができますが、あえて、辞書や本を使って調べることを提示します。子どもたちは、どこに書いてあるのか、どう調べればよいのか、時間をかけ試行錯誤しながら調べていきます。その試行錯誤が大切だと思います。試行錯誤することは、自分の考えと向き合い、整理し、新たな解決策を導き出すことにつながります。その繰り返しで、知識や思考を広げていきます。もちろん、AIなどを使って時間短縮する場合も必要です。しかし、全てがそうならしまえば、学びを深める機会が減ってしまいます。簡単な山よりも、険しく時間をかけた山の方が、登り切ったときの達成感は大きく、より心に残ります。学ぶことも同じだと思います。

力を身に付けることができるせっかくの学びの機会を、我々大人が奪っていませんか。子どもたちが何かの課題に直面したとき、すぐに手を差し伸べるのではなく、いったんその場を子どもに任せ、そっと見守ることで、学ぶ機会を作ってあげてください。もちろん、全てを子ども任せにするのではなく、見守りながら、いつでも手を差し伸べることができるように寄り添ってあげることは大切です。私も、見守ることと手を差し伸べることのバランスを考えながら、未来をつくる下永谷の子を育てていきたいと思っています。